

# 熊 事 研 会 報

第100号

平成22年10月1日

発行人 熊本県学校事務研究協議会

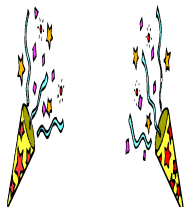
会長 宮本 和明

編集代表 研究部長 平木 雅万

〒869-4402 八代市泉町栗木5866

TEL0965(67)2029 FAX0965(67)2027

- ・ 会長挨拶
- ・ 第100号記念寄稿
- ・ 研究部長より
- ・ 事務局長より
- ・ 歴代会長等名簿
- ・ 県事務研大会開催のお知らせ
- ・ 編集後記



## 「会報第100号を記念して」



熊本県学校事務研究協議会 会長 宮本和明

昭和58年の第1号発行から、今回で熊事研会報が第100号となります。「百」という数字には、数字本来の意味以外にも百歳まで生きるや友達を百人作るといった場合のように、「たくさんの」「こんなにも長く」といった意味が込められている最初の数字のように思います。熊事研会報は、四半世紀以上の時をかけ到達いたしました。号数の分だけ、諸先輩方の熱意や会員の皆様の実践記録や思いが込められていることを考えると、今更ながら身の引き締まる思いです。

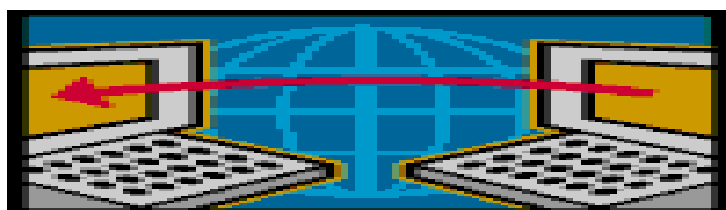
「故きを温ね新しきを知る」という温故知新の言葉通り私たちは、その歴史の継続の上に立って新たな一步を踏み出さなくてはなりません。学校そのものが大きく変化する中で、私たちは今一度その職責はどうあるべきか考えていく必要があります。会員の皆様におかれましては、そのための自己研鑽や論議の場として、この熊事研の活動や会報を大いにご活用いただければ幸いかと存じます。役員一同、皆様とともに一步一步確実に前進できるように会の運営に努めていくことをお誓い申し上げて、第100号記念のご挨拶と致します。

今後ともご指導ご協力の程よろしくお願い致します。

なお、会報につきましては、会報98号でもお知らせしましたとおり、今年度より、基本的にペーパーレス化することとなりました。私たちの職務そのものがパソコンや情報ネットワークと切り離せなくなっており、ホームページで情報発信することが有効な手段であると考えました。今後情報を速やかに発信することや双方向の意見交流を迅速に進めたいと思っています。もちろん今回の第100号のように、紙媒体での発行が必要と判断した場合は、現在の形で発行いたします。ご理解ご協力よろしくお願い致します。

### 熊事研ホームページアドレス

<http://www.higo.ed.jp/ws/jimukenws/>



# 「祝 100号！ 先人に思いを馳せ、益々の発展を祈ります」

西原村立西原中学校 日野育夫

熊事研会報100号、おめでとうございます。熊事研役員をはじめ多くの方々のご尽力で発行され、読み続けられている事に感動を覚えます。号数を重ねる毎に内容も充実し豊富になって参りました。今後も会員の拠り所として発行されていくことを期待します。

私は昭和48年4月に就職して38年目を迎えました。当時は未配置校が多く、研修機会も無いままでの赴任でしたから学校でどのように過ごしていいのかわからず戸惑ったものでした。先輩を訪ね、少しずつ仕事を覚えていきました。きちんとした研修も無いまま仕事を始めていく不思議な職種に不安も感じたものです。翌年、城南三市三郡研究大会案内が届き、県南地区で同じ職種の方が集まり研究活動をされていることを羨ましく思いました。採用3年目に熊事研が誕生しました。大会挨拶で初代会長の淵田勇象先生が、「熊本県下全ての事務職員が集う研究会を作っていこう」と力強く挨拶され勇気が湧いてきた事を思い出します。本会発足に向けて献身的な活動をされた先人達のお陰でスタートしました。

爾来、熊事研は着実な歩みを重ね、36回目の研究大会が近づいて参りました。私も36回全ての大会に出席でき、研修のみならず旧交を温め合う場として元気をいただいた事に感謝します。今後も、会員が少しずつ力を出し合い研究団体として益々発展していきますことをお祈りします。

## 「会報100号の発行おめでとうございます」

あさぎり町立上小学校 魚住光二

熊事研発足以来35年間の活動の積み重ねの中で100号という記念の数字が達成されましたことは、熊事研役員並びに関係各位の努力のおかげと心から感謝します。

私は1974年採用で、最後の城南地区事務研から翌年の熊事研発足へと大きな歴史的転換点を目前にしながら学校事務職員人生をスタートさせました。

同時に、当時人吉球磨で研究されていました「標準的職務内容」とも切り離せない因縁を感じていました。採用3年目、「第2回熊事研菊池大会」で「標準的職務内容」について「まずは県からの通知が必要でその後学校現場へ定着させる努力が重要」と発表し、会長時代には「標準職務表の通知」を出してもらうよう熊事研を代表して県教委へお願いに行きました。奇しくも退職目前の2010年3月に県教委から「標準的職務内容の通知」が出されたのですから、これには正直驚きました。私たちが要望していた『原案』から、「学籍に関する事」、「服務に関する事」などが追加され、少々気になる表現もありますが、1972年に県教委へ「職務内容確立に関する要望書」を提出して38年後に熊本県の学校事務職員の悲願であった「県の通知」が出されました。それを根拠として各市町村段階でより具体的な職務規定制定の要求ができるようになったことは大きな前進であることに間違いありません。

今後、熊事研に結集された皆さんが自分の学校の実態にあった、きめ細かな職務内容の点検を行い、更に共同実施組織や市町村事務研並びに熊事研の場で検証を行えば必要な職務権限等も含めより良いものができ上がってくるものと思います。

皆さんのご健闘を心から期待しています。

# 「熊事研会報第100号おめでとうございます！」

元 熊事研会長(平成18年度～19年度) 川上安生

早いもので、私が定年退職して3年目になりました。先日、「熊事研会報第100号を記念特集号として発行することになり、創刊当時の関係者として寄稿をお願いします。」と依頼が入り、驚きと同時に「嗚呼、もう100号になったのか！」と感慨深いものがありました。

思い返せば、昭和58年、私が35歳の時、熊事研7代目事務局長に指名され、当時の古澤昭会長の下で挑戦した主題は、熊事研の改革、すなわち、①「事務局体制の創設」、②当時、まだ発行されていなかった「会報の創刊」、③「県大会運営の改善」、④当時、未加入の熊本市での「個人会員制度創設」、ということでした。(なお、「学校事務必携」は翌年昭和59年6月に創刊)しかし、当時、年会費は僅か600円の時代であり、熊本市は未加入でした。会報などを発行する予算的余裕もなく、会則のどこにも書いてない「新たな取り組み」をゼロから始める訳ですから簡単な話ではなく、何度も挫けそうになりました。

しかし、それでも、改革を実行できたのは、会員や理事の方々のご理解とご協力。そして古澤会長以下、事務局(当時5名)の仲間たちの熊事研に対する大きな夢(ビジョン)と使命感(ミッション)、そして並々ならぬ情熱(パッション)と働き(チームワーク)のおかげと今更ながら痛感しています。誠に感謝です。

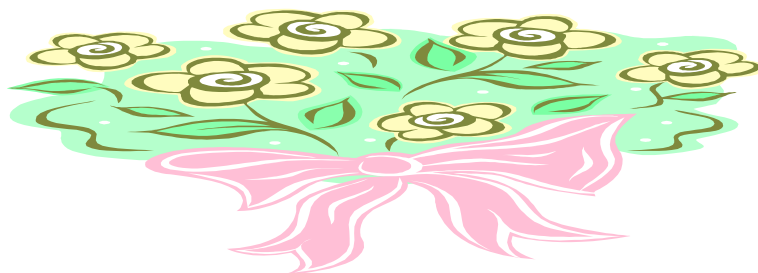
ところで、会報創刊号の発行は昭和58年10月13日、第9回熊事研水俣大会直前でした。ちなみに、創刊号(B5版全8頁)の内容は、①会長就任挨拶(古澤昭)、②熊本県教育長挨拶(外村次郎氏)、③前会長退任挨拶(梅野大学)、④初代事務局長挨拶～自戒の詩(中西行人)、⑤水俣大会案内(長谷川徹郎副会長)、⑥昭和58年度役員名簿一覧、⑦資料編(=県事務研の歩み、管内別・職種別の教職員数、県教育予算の概要)、⑧「事務局の新設、会報の創刊について」(川上安生)、⑨編集後記、となっていました。

この創刊号では、私たちの大先輩であり、熊事研創立や職務確立に尽力され、若手のお手本でもあった初代事務局長の中西行人氏(故人)に特別寄稿をお願いしました。当時、中西氏は重い病で入院中でした。見舞いを兼ねて原稿依頼に行った所、喜んで快諾され、逆に励まされたことを思い出します。

私が編集長をしていた頃の会報は、機関誌的色彩が強い現在とは違い、「同人誌的な雰囲気」があり、研究大会、理事会報道だけでなく、全事研情報、特集記事、地区研紹介や事務室訪問記、そして読者の広場(投稿欄)や文芸欄(詩や随筆など)など情報や意見交換の欄を設けて、会員相互のコミュニケーションを深める役割を果たそうとしていました。そのことによって、会員にとって遠い存在だった熊事研を、より身近な存在に変えていこうという思いがありました。(詳細は、「熊本県学校事務五十年史」134頁を参照。)

しかし、そのような変遷もありましたが、その後、四半世紀以上に渡って会報発行を引き継いでこられた歴代事務局・研究部の方々の働き、又、毎回ご愛読していただいた会員の方々のご支援に対し、敬意と感謝の気持ちを捧げたいと思います。

最後になりましたが、改めまして熊事研会報第100号の発行、本当におめでとうございます。これを機に今後、熊事研が益々ご発展されますよう心から祈念いたします。



## 「今後の熊事研研究部及び地区研の研究活動について」

研究部長 平木雅万(八代市立泉第二小学校)

2学期を迎え、各地区には、12月の県大会に向け、レポートの最終仕上げ、分科会の運営方法の検討等大変お世話になっています。熊事研活動の中でも、県大会、特に分科会がこれまでの熊事研の研究を支えてきたものであると思っています。今年度も、活発な論議と、実践の交流ができる分科会となるよう、各地区の創意工夫をよろしくお願いいたします。

さて、研究部では現在、来年度開催予定の全事研鳥取大会での分科会発表に向け、「教育課程と学校事務」をテーマに研究を進めています。各会員には2学期早々アンケートに御協力いただきありがとうございました。この研究は昨年度、全事研福岡大会で発表した「学校教育目標を達成するための学校財務の在り方」を引き継ぐものであることは会報99号の研究部だよりでも書いたとおりです。この研究の中で学校教育目標と財務の乖離を問題にしました。「学校教育目標を達成するためにあるのが教育課程(カリキュラム)であり、その実施を支えるものが財務(予算)である」。当たり前のことであるはずのことを私たち事務職員はあまり意識して仕事をしてこなかった。その結果として教育目標と財務が乖離してしまったのではないかと思います。

事務職員の「学校経営への参画」が問題にされますが、公立の小中学校においては、学校経営(組織マネジメント)＝教育課程経営(カリキュラムマネジメント)であるといってもいいと思われます。つまり、学校経営に参画するとは、教育課程の実施、評価、見直しに関わっていくことだといえます。といっても、難しく考える必要はなく、現在普通に行っている仕事は、財務にしる情報にしる実際には教育課程と深く関わっているのです。

研究部の研究もまだまだ道半ばで、十分なものではありませんが、12月の県大会には、研究部としての考えを整理し、会員の皆様にお示ししたいと考えています。会員の皆様も、日頃の実践の中で「教育課程」について少し意識をして、自分の仕事を見直してみてください。自分の学校がどんな教育目標(本年度の重点目標)を掲げ、どんな教育活動を展開しているのか。そしてその活動にはどんな予算が必要なのか、まずは財務に絞って見直してみるのもいいと思います。

平成24年度をめどに全地区発表を見直し、研究部で設定したテーマに沿って、各地区持ち回りでの分科会発表に移行することも会報99号でお知らせしています。現在研究部で検討している研究テーマは、教育課程や教育目標といった学校経営にせまるものになりたいと考えています。県大会での研究部発表をお聞きいただき各地区の活動に取り入れていただければと思います。

各地区と研究部が一体となって、これからの学校事務の在り方について研究を進めていけるような熊事研にしていきたいと思っていますので、会員の皆様の御協力をお願いいたします。



## 「会報 100 号に寄せて」

事務局長 上田 千浩(熊本市立古町小学校)

今回、私に与えられたテーマは、「熊事研の今後」でした。しかし諸先輩方が築きあげてこられた「熊事研」に対して、たいそうなことは言えませんので、今の私の思いを述べたいと思います。

熊事研に係わり3年目になります。以前は、毎年研究大会が開催される度、「傍観者」として参加していました。研究発表を聞き、ただ感心して帰っていました。当然、持ち帰って自分の実践には繋がりません。また熊事研組織の変遷、研究大会の開催方法や研究内容も、殆ど興味・関心がありませんでした。

しかし、熊事研に携わるようになり、役員の皆様や、全国大会等で他県の方から熊事研の話を聞くうちに、先輩方の「事務職員としてのプライド」と、「よりよい学校にするため、常に探求心を持つ」という情熱を感じました。また、事務職員の地位向上のため、研究団体と認められる組織を作り、研究を重ねてこられました。

平成10年の中教審答申では、「学校の自主性・自律性の確立について」述べられ、学校の裁量権を拡大する必要があり、学校事務も「学校規模や実態に応じて、学校事務を効率的に執行する観点」から組織化する必要性が提言されました。それにより全国的に「共同実施」への取り組みが始まり、熊本県では平成20年度より本格実施されました。全国的には、様々な共同実施の形態や考え方があるようです。

私たちの周りは急激な変化を続けています。しかし、職務の基本は「子どもたちのために」だと思います。この環境変化の中でも、先輩方の情熱を受け継ぎ、常に探究心を持つことができれば、「子供たちのために」という基本は守られていくのではないのでしょうか。そこから、改めて「今私たちがやるべき事」が見えてきたように思えます。

最後に、お忙しい中、寄稿をいただいた先生方有難うございました。今後も熊事研がより発展しますことを祈念して終わりにします。



## 歴代会長等名簿

これまで熊事研会長、副会長、事務局長、研究部長です。

### 歴代会長等名簿

年度	会長	副会長	副会長	事務局長	研究部長
1975	淵田 勇象	上杉 忠信		中西 行人	
1976	鋤先 正明	横田 親義	池田 力	畑田 典生	
1977	杉山 幸夫	注)梅野 大学	注)桑原欽一郎	中嶋 敏之	
1978	横田 親義	注)桑原欽一郎	注)坂本 俊篤	本山 礼治	
1979	田代主基男	坂本 俊篤	深水 景昌	琴原 安幸	
1980	同	古澤 昭	深松 大介	同	
1981	梅野 大学	同	中嶋 敏之	市原 光也	
1982	同	宮本 昌則	同	同	
1983	古澤 昭	武田 博	長谷川徹郎	川上 安生	
1984	同	溝上 忠典	宮野 良治	同	
1985	同	同	市川 新一	同	
1986	池田 力	田河 辰彦	山形 秀晴	同	
1987	同	渡辺 政道	白石 洋	築山 元博	
1988	堀川 富雄	池田 宏	劔 捷次	同	
1989	同	今村 徹也	岩根 達夫	松岡 信雄	
1990	同	本田 明博	次山 和夫	同	
1991	同	村井 康宏	松本 信男	平木 雅万	
1992	伊織 信介	藤川 英一	名島 弘和	同	
1993	同	貝瀬 国光	中村 正義	同	
1994	日野 育夫	澤村 英一	田中 誓	同	
1995	同	同	江浦 正博	村田 省二	
1996	澤村 英一	木下 武司	松元 昇	同	
1997	同	金田 隆	片山 宣子	船越志津子	
1998	大跡 尚雄	東 洋子	中村 光春	同	
1999	同	原口 豊	松本 秀久	同	
2000	同	田中 千秋	岡部 幸造	藤川 英一	
2001	日野 育夫	今坂 誠也	桑原 義勝	同	大岩 眞二
2002	原口 豊	浅香 幸一	同	同	同
2003	同	軒口 輝男	池田恵理子	仲光 賢治	同
2004	魚住 光二	松崎 喜一	藤本久美子	今坂 文枝	同
2005	同	中川 主税	井上 雅晴	同	同
2006	川上 安生	坂本 一博	平木 雅万	同	藤本久美子
2007	同	藤川 英一	同	坂本 一博	同
2008	中嶋 康普	同	同	大井 聡恵	同
2009	同	池上 雅一	永野亜紀子	同	平木 雅万
2010	宮本 和明	松本 和朗	同	上田 千浩	同

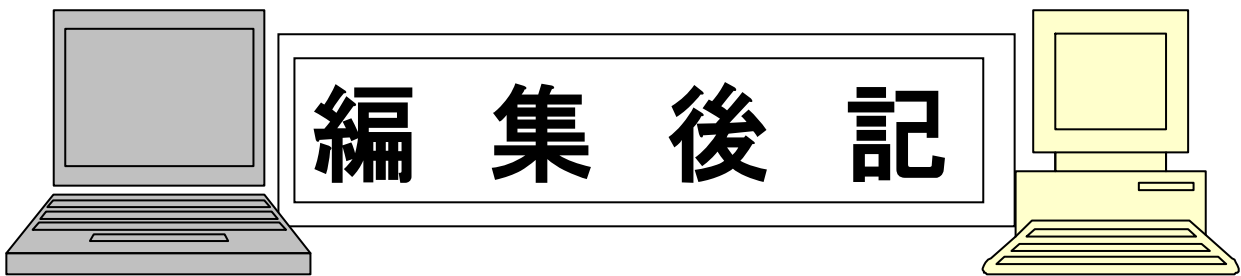
注) 今回調査しましたが、一部不明の箇所があります。お詫びいたしますと共に、もしご存知の方がいらっしゃれば熊事研までご一報くださいますようお願いいたします。

# 第36回熊本県学校事務研究大会開催のお知らせについて

もう皆様の手元に案内が届いていると思いますが、「第36回熊本県学校事務研究大会」が平成22年12月1日、2日の日程で開催されます。

各地区で大会申込の手続き等が進められています。年1回の研究大会ですのでぜひ参加をしていただきますようよろしくお願いいたします。

研究発表レポート等については、案内の通りです。また、熊事研ホームページにも掲載されていますのでそちらのほうもご覧ください。



熊事研究会報100号発行につき、歴代会長に寄稿依頼をしました。皆様、熊事研(会報)に対する思いが強く、比例して長い原稿をいただきました。しかし今回は紙で発行することから「紙面の都合」という制約で、多くの文章を削りました。原稿を頂戴しながら、それを削る作業に矛盾を感じ、申し訳ない気持ちになりました。

紙媒体の限界を感じたと同時に、電子化によって正確かつ大量により早く皆様に情報が伝えられる利点を感じました。

ただ、「紙」の会報で「熊事研との係わり、つながり」を実感する会員もいることも事実ですし、作成する側にも文章を校正、推敲する機会が少なくなり、「紙面作りの面白さ」もそれに比例するようになるのではないかと思います。

今回の作成過程で、元会長の川上さんから当時の会報作りの思い出話をいくつか聞きました。原稿依頼や投稿欄のことなど。そのときのことを懐かしく思い出しながらお話されたことがとても印象に残りました。そして「熊事研との係わり」という目的も会報にあったのだと感じました。

ただ、昔も今も変わらないことは、「原稿締切り」に苦勞していることでした。

今後も、創刊当初と同じく、熊事研をより身近に感じることができるような会報を作るよう努力していきます。

今後も熊事研に対するご意見等がありましたならばメールにてご連絡ください。

メールアドレス [jimukenws@edu-c.pref.kumamoto.jp](mailto:jimukenws@edu-c.pref.kumamoto.jp)